

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

村上先生のこと

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男 メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/453

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



村上先生のこと

岡 本 崇 男

ややつれない表題だが、「村上先生の思い出」とか「村上先生を送る言葉」と書いてしまうと、村上先生を自分の記憶から無理矢理追い出そうとしているような気がしてしまう。ただ、もしもわたしが「〇〇先生の思い出」とかつて書いていたとしても、それは当時の慣用に従ったまでのことであって、他意はなかったと断言しておく。

話はわたしが学生時代の頃に遡る。

村上先生を初めてお見かけしたのは、昭和49年の夏のことだったと記憶している。当時わたしは神戸外大ロシア学科の二年生だった。お盆までは田舎の親元には帰らず、金はなくとも暇はあるという、楽しい夏休みの過ごし方をすでにその前年に経験していたので、昼間は月曜日から土曜日まで大学に顔を出して、旧六甲学舎唯一の憩いの場であった大学生協の喫茶部（パーラー）を根城にして、知り合いを見つけては無駄話をするのを日課にしていた。そして、もう一つのルーティーンは、大学のプールで二時間程度泳ぐことだった。下宿の近所には王子動物園の立派な50メートルプールがあったのだが、人が多いという煩わしさ、場所によっては深くて足が届かないという恐怖、そして何といても入場料の50円（当時、煙草と缶ビールはどちらも100円で買えた）を払わねばならないなど数多くの障害があったので、大学のプールに通うことにしていた。

そしてある日のこと、いつものようにプールに入って、のんびりと泳いでいた。すると、突然泥まみれの男達が10数人プールの門を開けて中に入って

来たかと思うと、その場で身につけているものを全部脱いでシャワーを浴び始めた。中に二三知った顔が認められたので、それがラグビー部の現役とOBだということがわかった。この人たち、傍若無人とは言わないまでも、少なくとも遠慮という概念とは無縁の行動をするのであった。すでにわたしを含めて何人がプールで泳いでいたのだが、こちらには一瞥もくれず、まるでその場には自分達しかいないかのように楽しげに言葉を交わしながら、水の中に飛び込み、またあつと言う間に引き上げて行った。

その烏の行水の一団の中でひととき目立っていたのが、小柄ながら筋肉質で、長髪、眼光は至って鋭く、上唇を完全に覆い隠してしまうほどの日本人ばなれした立派な口髭を蓄えた年齢不詳の人物であった。ちょうどディズニーがアニメ化したキプリングの『ジャングルブック』の主人公モーグリがやや老けて、とてつもなく野性化したような姿が印象的であった。ただし、それが村上先生だということはその時まだわからなかった。

村上先生とお話するようになったのは、「烏の行水」の翌年度に先生が大学院生として外大に帰ってこられてからのことである。たまたま村上先生の指導教官とわたしのゼミの先生が同じ松川秀郎先生であったというのが縁となった。しかし、どうやって知り合いになったのか思い出せない。もしかすると、すでに2年生の後期になってから時々研究室にお邪魔していた松川先生から紹介されたのが知り合うきっかけとなったのかもしれない。いずれにしても、村上先生と言葉を交わす場所は、松川先生の研究室か、あるいは大学生協のパーラーであった。好奇心が強く、話題が豊富な方なので、いろいろなことを教えていただいたが、中でも次の忠告は強く印象に残っている。曰く、「金をもらいながら勉強させてもらえ」。

例えば、通訳とか翻訳のアルバイトが舞い込んだとすると、恥をかくのを覚悟で引き受けろというのである。仕事を依頼した側の立場に立つと、たいした力もないのにしゃしゃり出てくる若造は迷惑な存在なのかもしれない。しかし、報酬を貰うというプレッシャーを感じながら仕事をやり遂げられ

ば、それなりの自信も生まれると村上先生はおっしゃるのであった。確かにそのとおりで、自信ができるまでこの種の仕事はしないと云っても、実際に経験しないと自信など生まれる筈もない。言語の学習は、いつも自分の身の丈よりも少し上を目指していないと進歩しないと今わたしも実感している。そして、——これは別の方から教えていただいたのだが——身入りのいいアルバイトで稼いだ金は、本や辞書に投資すれば良い。「勉強するためには金が必要だ」というのも真なのである。

修士課程終了の後、村上先生は2年間神戸大と岡山大学の非常勤講師としてロシア語の授業を担当され、1979年に神戸大の助手になられた。それから丁度30年間、ロシア学科の専任教員として研究・教育に勤しんでこられた。特に、最後の10年は初学者の教育に熱意を傾けておられたように見受けられる。この文章を書くにあたり、ロシア学科の学生数人に「村上先生はどんな人だった」と尋ねたところ、全員が「とても良い先生でした」と言ったのには、正直なところ驚いてしまった。すこしくらい違う見方をする学生がいてもよさそうなものなのだが、そうではなかった。おそらく、教育に対する先生の熱意が学生に素直に伝わっていたのだろう。

ところで、村上先生は「皆さん逆立ちをしてはいけません」と講読の授業中によく学生に注意されていたそうである。これは、訳読に詰まると逆立ちをする妙な輩がロシア学科によくいるからではなく、テキスト中に関係代名詞を使った構文に遭遇すると、かなりの学生が反射的に関係代名詞節を連体修飾語にしてしまうという現実があって、その行為を諫めているのである。また、時間や条件や理由を表す従属節が主文の後に置かれている場合にも、同じ現象が見られる。しかし、これはある程度仕方のないことで、中学・高校の英語の時間に学生たちが身に付けた、あるいは身に付いてしまった翻訳の方法をロシア語の文章の解釈に応用しているに過ぎない。漢文の訓読のように「逆立ち」することがルール化されているのであれば、それも一つの流儀ということになるのだろうが、欧文の翻訳にそのような決まりはない。例

えば安西徹雄『英文翻訳術』（ちくま学芸文庫）や同書を構成する上で重要な柱となっている江川泰一郎『英文法解説』（金子書房）では、ある程度英語の語順に則して例文を訳す工夫がなされている。しかし、このような気の利いた本を大学に入る前に読んでいる学生は、それほどいないのではなからうか。おまけに、特にロシア学科に多いと思われる地道にこつこつと勉強するタイプの学生は、一度信奉した教条を変えることに抵抗を示しがちである。そこで、村上先生も繰り返し注意を喚起する必要に迫られるのである（ただし翻訳に工夫を凝らす学生が皆無だというわけではない。少数ながら確実に存在しているのも事実である）。

ただし、この逆立ち禁止令を唱えるロシア学科の先生は、村上先生が初めてではない。この文章の初めの方にお名前の出た松川秀郎先生が「逆立ちしたらあかん」とよくおっしゃっていた。「最初の2年間で君たちにロシア語の基礎を教えたのだから、これからは自分が発見したことや新たに獲得した知識をわたしに教えてほしい」と松川先生は3年生以上の学生におっしゃるのだが、それは簡単にできることではない。先生は理屈では学生ごときに簡単に負けないという確固たる自信をお持ちで、学生が何か言うと、徹底的に論駁するのを教育方針の一つとされていたので、思いつき程度のことを口に出した学生はとんでもないしっぺ返しをくらうのであった（もちろん、学生としては何も言われぬよりも遥かにマシであったのだが）。しかし、わたしが学部生であった時に大学院に在籍しておられた村上先生は全く怖じることなく、「わかりました。先生。教えて差し上げます」という態度で松川先生に接することのできたおそらく唯一の教え子だった。教師と学生が、学問の場で対等に向かい合う光景を見たのは、初めてのことであった。松川先生は学生に「こんなこともわからんのか。君（ら）はアホか」と気軽に仰るのだが、「センセ、こんなこともわからんのか、阿呆やなー」と言い返せる学生は、村上先生以外にいなかった。松川先生としても初めての経験ではなかったのだろうか。不思議なことに、そこまで言われても先生は気分を害し

た素振りも見せず、ただ胡麻塩の頭を搔いておられた。お二人は教師と学生というよりも馬の合う勉強仲間であるように思えた。そして、「逆立ちをしない」翻訳の正当性を確信するに至ったのも、チェコの言語学者V・マテシウスが理論化した「機能的文区分」をお二人が競い合って勉強された結果であるような気がする。

この「機能的文区分」という考えはソビエト科学アカデミーが1970年に出版したロシア語文法書に採用されて以来、ロシア語学の世界に普及し、今では、ロシア語の語順を説明する際の基本原理となっている。この理論をやや乱暴に要約すると、伝達の価値が最も高い情報、つまり一番伝えたいことは、発話の際に文の（1）最初に置かれるか、（2）最後に置かれるか、あるいは（3）文中の位置にかかわらず最も強く発音されるということになる。（1）と（3）は、口頭のコミュニケーション（会話）に特有の現象で、伝えたい情報を最初に言って（多くの場合、後の事を省略して）しまえば時間の節約になるだろうし、また文中の位置にかかわらず語気を強めて発音された情報は聞き手の印象に残りやすい。これらに対して、標準的な散文では重要な情報が最後に置かれる。

例えば、「白雪姫が毒林檎を食べた」という状況があるとする。これを[白雪姫]-[食べた]-[毒林檎]という語順の単文で表したとすると、「白雪姫は毒林檎を食べた」あるいは「白雪姫が食べたのは毒林檎だった」という意味であり、[毒林檎]-[食べた]-[白雪姫]だと、「毒林檎を食べたのは白雪姫だった」という意味になる。また、条件を表す従属文と帰結を表す主文からなる複文についても、[従属文]-[主文]と[主文]-[従属文]という二通りの語順があり、前者は「AならばBする」だと解釈でき、後者は「BするのはAである場合だ」と訳すことができる。実は、最近よく耳にする外国文学の「新訳」を「旧訳」と比較してみると、訳文の言葉の順序が違っていたり、あるいは旧訳で一つの文になっているものが新訳では二つの文に分けられていたりしていることに時々気付かされる。訳文が読みやすくなっ

た原因は、言葉遣いが現代的になったからだけでなく、「逆立ちした」「頭でっかちの」文が減ったからなのである。

六甲時代に、松川先生を中心にして、関西在住のロシア語・ロシア文学の研究者や院生の参加を得て、十数年の間ほぼ定期的に研究会が開かれていた。そこでは、しばしば「機能的文区分」のことが話題にのぼることがあったのだが、議論の主導権は常に松川先生と村上先生が握っておられた。そして、お二人の意見は、「語順には発想の順序が反映されている」という点で一致していたように記憶している。ただし、語順に発想の順序が反映されているとしても、単語のレベルでそうなのか、文成分のレベルでそうなのか、それとも文を構成する節のレベルでだけ言える話なのかは、実のところまだはっきりと決着がつかなかった。村上先生からこの問題についてまだ明確な形で説明していただけていないのが残念ではある。しかし、新たな人生を始められた先生に追いつがって聞き出すのも大人気ないような気がする。わたしたちのことを忘れてほしくはないのだが、持ち前の好奇心を発揮して、様々なことに挑戦されることを心より祈っている。